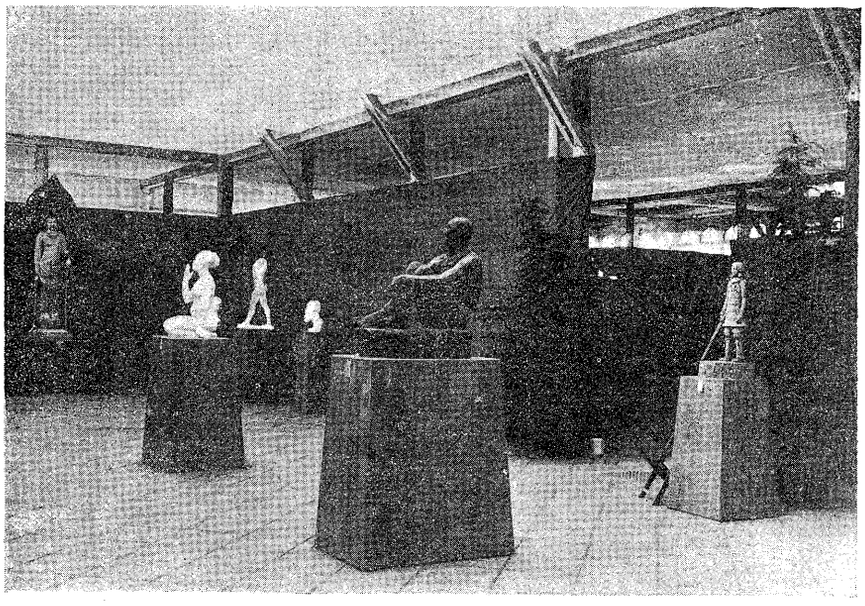
美術新報 第二百九十五號

二科會 日本美術院 展覽會號

二科會美術展覽會概觀

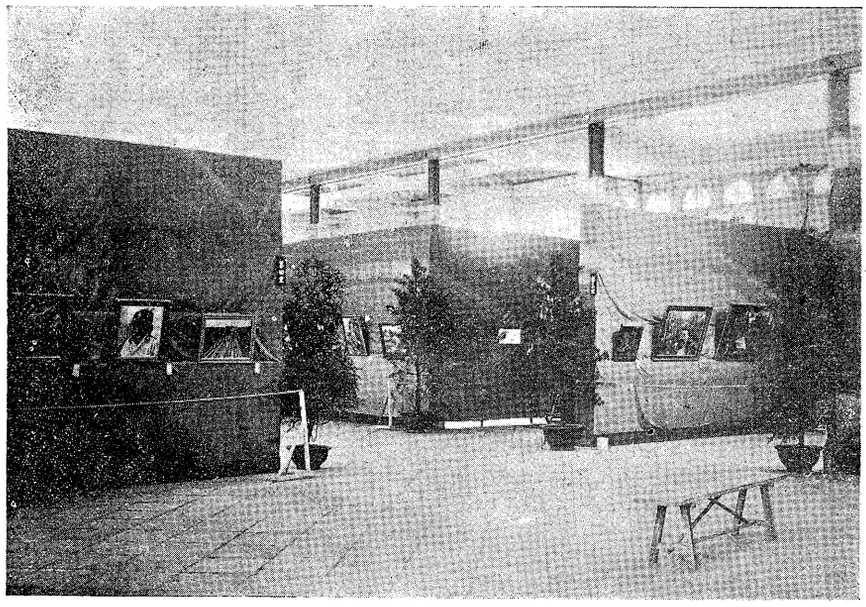
二科會美術展覽會は例年の如く其第六回作品展覽會を上野竹之臺に開く。出陳總數百三十三點にして八室に分別し第二室は新歸朝者黑田重太郎氏の作品に當て其十五點を竝べた。會場光線の取り方は昨年に劣りたるが上に曇天の日多かりし爲にや第六、七、八室は陰鬱にして作品の觀照に適せず、爲めに或は其眞價を觀取し得ざりし恨みあり。會場其物の不備なることは世間周知の事なりと雖も、室取り設計に今一層意を致さば、或は可成りの光線を得べく觀覽者の便は云ふ迄もなかりし。天候惡しき日は特に晝光色電燈の觸光多きものでも用ひて不完全ながら觀覽者の不滿足を補ふべきであつた。

吾人は常に云ふ。假令會員と雖も、さまで力作と稱すべからざるものを夥しく出陳することは何れの會を問はず遠慮すべきである。且つ賣約を豫期して種變りの作品を無責任に出陳することは會の權威にも關することである。夫れも新歸朝者にして未だ世に知られざる黑田重太郎氏の如き人の作品ならいざ知らず、殆んど珍らしからざる作家の小品等に會場の大部分を占領せしむるは大に考ふべきことである。昨年より今年と草土社系畫家の作品を見受け佳品も鮮なからざるは悅ぶべしと雖も其のモチーフに或る一種共通の臭味あるを悲む。中川一政氏の「下

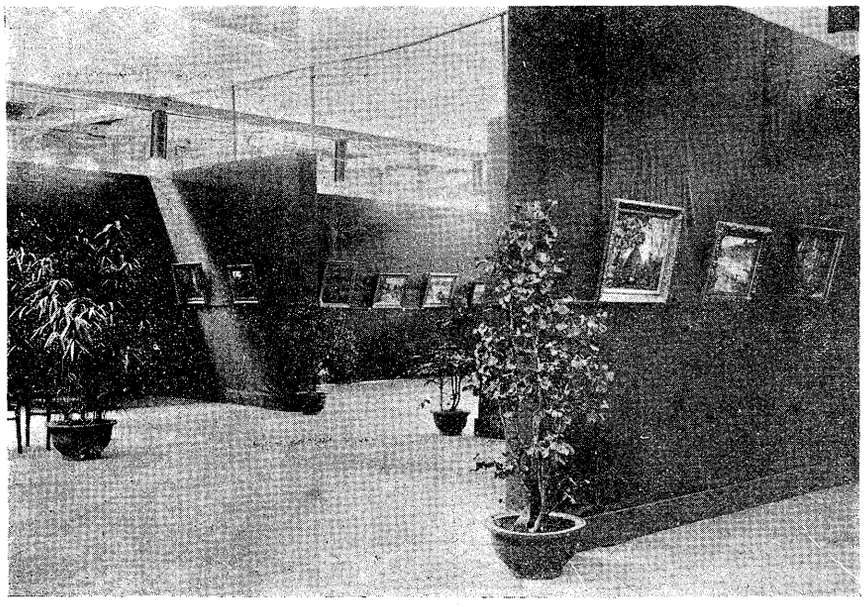


日本美術院展覽會彫刻部の光景

板橋の川邊、冬」の如き近來の佳作と云ふべし。黒田重太郎氏の作品十五點は佛國土産として何れも斬新なる趣味を齎らし注目に値ひするものあり、其他今回二科會友として推薦せられたる諸君の作品中愛すべき作品多し。然し乍ら二科會員諸君が兎角新傾向を嬉ぶの結果、不徹底にして輕薄なる一種の「まやかし物」をも採つて佳品中に置きたる態度は尠なからず吾人をして反感を有たしめる。又出陳作家の目立ちたる變化なきは無理ならぬ事とは云へ、審査員の趣味性が著しく固定的であつて、一種の型が出來たからで、止むを得ない事には相違ないけれども、今少し吾人の目を新たにする方法が望ましい。會員としては久方ぶりで齋藤豊作氏が四點を出品した。夫れも期待が甚しかつた丈けそれ丈、あまりに平凡に見えた。山下新太郎氏にも未だ何物かゞ無ければならぬと思ひ、安井曾太郎氏は大作「樹蔭」に於て其力の凡ならず美しき春秋に富める人なることを實證し、又例に依つて其「ダリヤ」は可憐なる作品。正宗得三郎氏十六品中「日の直射せる海」の如き氏の作品として稍類例を異にす。「奈良の落日」は大作なりと雖も、光線の取扱ひに不注意の點あり、素人にても首肯し兼ぬる描寫上の缺點は氏の素質に散漫なるものあつて存するに非ずや。石井柏亭氏は例の如く淡々として白飯の如く、而かも一種のグーなしと云はず。さり乍ら就中二三の佳品を採つて此壁面を塡せば更に可ならん。有島君の作何れ



日本美術院展覽會洋畫部の光景



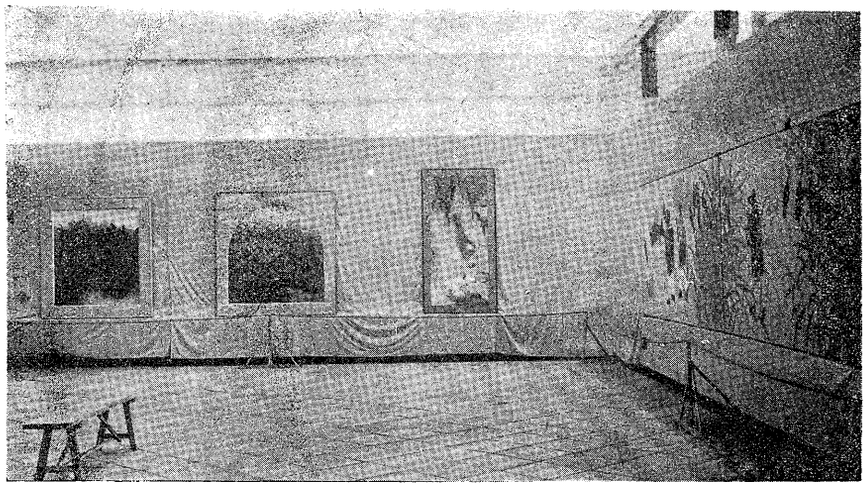
二科會美術展覽會の一部

も佳品として推すべきも眞に氏本來の œuvre たらず。九里四郎氏に「海女」「椿」等あり。

日本美術院展覽會

概觀

日本畫部。大體院の展覽會は日本畫が呼び物となつて世間の不分屋を騷がせるのであつたが、赤んぼも三年經てば三つとなるやうに近來稍描く人も觀る人も眞面目となつたと思ふ作品は總じて奇に走らず、眞摯な傾向を帶びて來た事は何よりである。大觀氏は種々の方面に於て卓越せる技巧を示し觀山氏の「東坡先生」と相並んで院の先輩たる品位を傷けざる處に重味があり、恒富氏の「湯女」は陳列の場所よろしからざりしにもよるが、甚しく見劣りせられた。入選者としては近藤浩一路氏がある。美術學校洋畫科の卒業製作に東海道五十三次を描いた氏ではあり、其後積んだ邦風繪畫の描寫上の經驗が加はつて此等の作品が生れたのは驚異とするに足らぬ。吾人は此等の作品が逸品であると云ふ事に強ひて不服を唱へる程旋毛まがりではないが、院にありて初めて氏の力を稱へる人の無智と浮薄を笑ひたい。小林古徑氏の「麥」はあかず眺める作品にはあらねど上品なる氣持妙へに現れたるを思ゆ。川端龍子氏の「士」はバナルな言葉ながら氣取つた作品であつた。



日本美術院展覽會日本畫部の光景

洋畫部。には新歸朝者にして新たに本院の同人たる足立源一郎氏の作品多數を見る。二科に出陳したる黑田重太郎氏の夫れよりも明かるい點に於て異なり、技巧からは黑田氏などの年輩でなきやうに觀取せられた。長谷川昇氏裸女を描き山本鼎氏町長　肖像を寫す。小杉未醒氏「老子」を描いて氏の未だ足らざる處を遺憾なく露はす。氏は好んで主題を支那の古哲人にとる、而かも漫然と得來るに於ては不可なしと雖も、既に「老子」を指す時は多少の研究を要す。何となれば印度の佛菩薩を描寫し彫刻せんと欲するものは造像の形式を踏襲して或るカノンの埒外に出づる能はざるが故に却て無理は尠ないが、列仙傳等の如きものに便りて支那の古人物を描出することは大に考へ物であらう。即ち單に繪畫なる所以を以て許すべからざるものあるが爲だ。眞道黎明、小川芋錢、山村耕花氏等其他同人幷に院友の顏觸前回に大差あるを見ず。

彫刻部。美術院中に於て最も緊張せる部分であつて吾人が常に院の彫刻に重きを置き其作品の價値を充分アップレシエするの義務を負はねばならぬと考ふる程同情がある。併し院の同人中にても彫刻とは何であるかと云ふことを知得せられぬ人達もないではない。勿論何れの方面に於ても玉石同架と云ふことは免れぬが、院に於ては特に其點が目立つ。中原悌二郎氏の如き石井鶴三氏の如き彫刻に生命を托して何物をも顧みない人達と、無智ながら世人に迎へられん